

江戸遺跡研究会第85回例会は、2002年5月15日（水）18:30より江戸東京博物館学習室にて行われ、小池聡氏より「港区上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査」の報告をいただきました。

港区上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査

小池 聡

（盤古堂考古学研究所）

港区高輪一丁目27番地に所在する上行寺跡・同門前町屋跡遺跡の調査を、平成13年9月20日から平成14年5月8日まで行った。調査面積は約6,000m²である。調査原因はマンション建設である。現地調査終了後僅かに2週間であり、現状では出土遺物の約50%のみ水洗が終了している状況であるので、ここでは現地調査時の所見に基づいた成果についてのみ報告する。

2．遺跡の立地（第1図）

本遺跡は、JR品川駅の北西約800mに位置する。西側を桜田通り（国道1号線）が北上している。また、東側は旧町名を残す二本榎通りに面している。

地形的には、高輪台と呼ばれる台地上の平坦面が調査範囲の東側約2/3を占め、西側部分は斜面部と北東に開口すると推定される谷低地部となっている。台地斜面部と谷低地部との比高差は約4mを測る。標高は約28～19mである。

周辺には、台地上及び低地部に寺院が比較的集中している。

3．上行寺及び同門前町屋の沿革（第2～5図）

富士山上行寺は『御府内寺社備考』によれば、慶長元年（1596年）江戸府内に桜田寺地を拝領する。その後、元和元年（1615年）八丁堀、寛永12年（1635年）に高輪伊皿子へ替え地となり、寛文8年（1668年）の火災により同地へ移転している。隣接地の古老談話では、昭和37年頃神奈川県伊勢原市へ移転したとのことである。伊勢原市には証言どおり現存している。

絵図による変遷を追うと、明暦3年(1657年)の『江戸大絵図』(第2図)では、当該地は光学院?が存在し東側に町屋が描かれている。また、延宝7年(1679年)の『江戸方角安見図』(第3図)では浄行寺・永真寺の記載が認められ、東側と南側に町屋が描かれる。安政4年(1857年)の『芝三田 二本榎 高輪邊絵図』(第4図)では、上行寺と東・南・西面に町屋が描かれる。

明治28年の『東京実測全図』(第5図)ではほぼ現況地形どおりの状況が窺える。なお、同図には谷低地部に徳明寺の記載がある。

また、二本榎上行寺門前町屋については文政11年(1828年)の『江戸町方書上』によれば、成立年代は不明であるが、元禄15年(1703年)2月と延享2年(1745年)に町名の由来となっている2本の榎火が焼き枯れる程の火災に遭ったとの記載があり上行寺も同時に罹災していると推定される。

4. 調査で検出された遺構(第7図)

調査時に振り分けた遺構番号は総数約550基である。出土遺物がなかった柱穴・土坑などや又は礎石群でも調査時に遺構番号を付していないものもあり、遺構総数は約800~900基程度ではないかと考えられる。

検出遺構の種別は、石垣、段切り、礎石群、堀、溝、地下室、ゴミ坑、採土坑?、墓坑、井戸、雪隠、水琴窟、池、瓦溜まり、雨落ち、土坑、柱穴等が挙げられる。

各遺構の配置から、1・2を東面門前町屋部分、3が南面門前町屋部分と推定される。4は礎石群が主体となっており、上行寺本堂ほかの建物と推定される。また、5~7は墓坑が集中しており墓域と考えられる。なお、南面門前町屋は低い石垣や溝などで区画され、西に下がる地形に沿って階段状に形成されている可能性が高いと判断される。

調査時に確認された各遺構の特徴を述べると、谷低地部の堀は出土遺物がほとんどなく明確に時期決定できないが、主軸方向が町割りとは異なっている。覆土などの特徴から江戸初期あるいはそれ以前の所産であると推定される。

上行寺本堂など建物群の礎石群(4)は、墓石を転用しているものが多く、その際墓碑銘を判読できないように「潰す」・「削る」など加工している。また、掘り方を持つ堅固な礎石も認められ、大型建物の存在が推定される。礎石群は2面認められ、2面目の直上に焼土層が認められる。

3ヶ所確認された墓域は、墓坑の形態・埋葬形態に差が認められる。5の台地上平坦面の墓域では方形又は長方形の掘り方内に、凝灰岩系切石の蓋石を持つ甕棺、方形木棺、寝棺、火消し壺や陶製蔵骨器が埋納されている。6の台地斜面部墓域では円形掘り方内に木片を伴い人骨が出土しているものも認められるので、直葬又は早桶などの埋葬形態

が推定される。7の谷低地部墓域では方形掘り方内に方形木棺・甕棺を凝灰岩系切石の蓋石を施して埋納している。墓域間では階層差などによる埋葬形態差が存在する可能性が高い。なお、方形木棺・寝棺・甕棺ともに「密」が充填されている例が認められる。

台地斜面部は大規模な段切りが施され、横穴状の室や地下室が構築されている。このうち124Rには陶製植木鉢など8点が床面直上に正位で置かれており、植木用の室かと推定される。また、この段切りは明治期に入って大谷石の大規模な石垣が構築されている。

斜面部の盛土層はG～N-15～23に掛けて2面目礎石群以下で、北東方向に開口する谷地形を埋めるように最大で3m程度施されている。盛土層中の出土遺物は少ないが、盛土層直下の不整形土坑520Rからは所謂初期伊万里皿が出土している。また、盛土層下の斜面部では、小規模な畝状遺構が認められ、畑として土地利用されていた可能性が高いと推定される。

5. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、江戸期から昭和30年代までの陶磁器・瓦・金属器・漆器を含む木製品など約1200箱に及んでいる。前述したように現状では約50%程度水洗作業が終了している。従ってその様相については、今後の遺物整理に期待したい。

なお、江戸期以前の出土遺物としては、古墳時代後期土師器片と縄文時代中期後半の土器片が微量ながら出土しているが、該期の遺構は検出されなかった。

6. まとめ

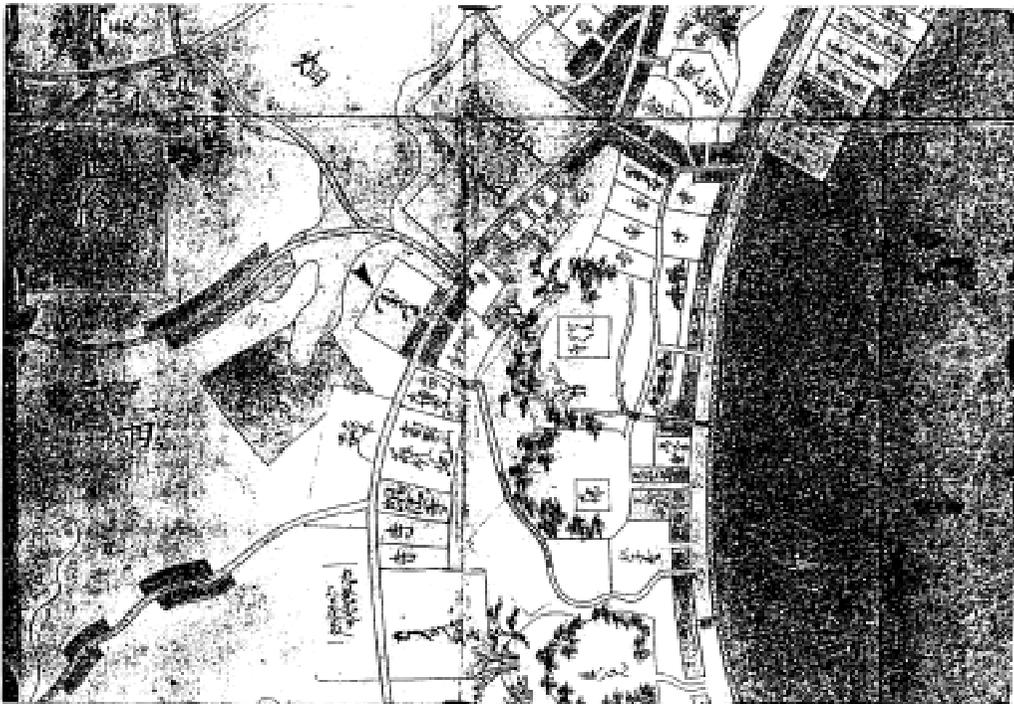
今回の調査では、前述した各絵図または『御府内寺社備考』に掲載された上行寺境内・同門前町屋絵図（第6図）と遺構群がほぼ近い様相で検出された。今後の出土品整理をとおして、礎石群・遺構群の重複関係や陶磁器類の年代観から上行寺及び同門前町屋の変遷をより詳細に、解明していければと考えている。

また、上行寺本堂など建物群の配置や間取り、門前町屋町割りや間取りなど絵図や文献との検討も大きな課題である。

いずれにしても、現地調査が終了したばかりであり、寄り多くの成果を蓄積出来るよう整理作業を進めてゆく所存である。



第1図 遺跡の位置



第2図 「江戸大絵図」明暦3(1657)年



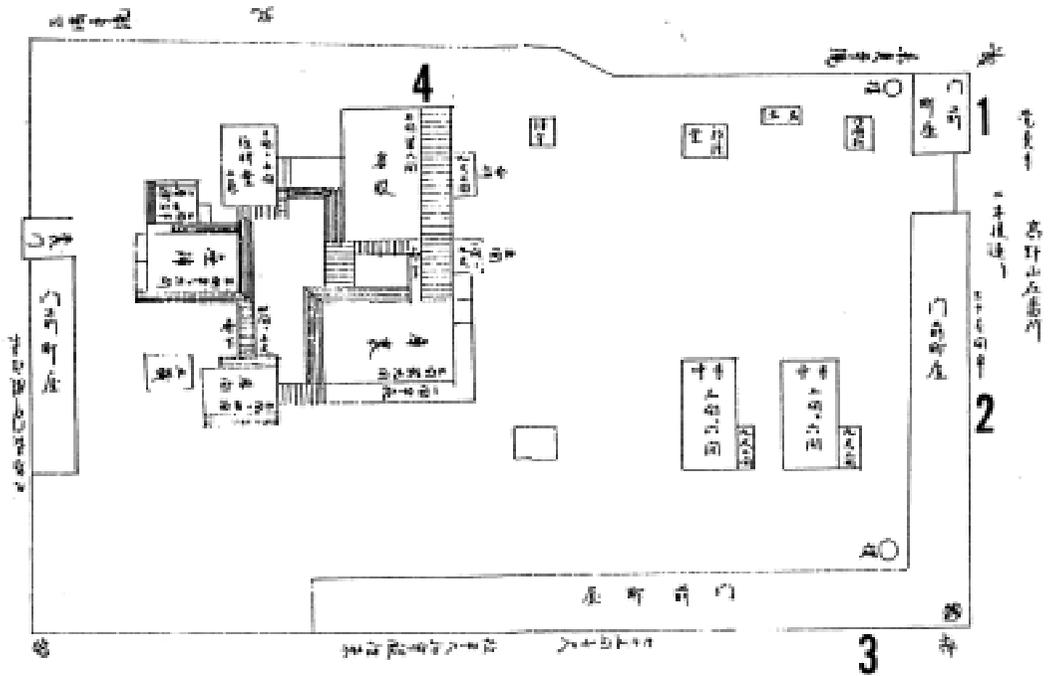
第3図 「江戸方角安見図」延宝7(1679)年



第4図 「芝三田 二本榎 高輪邊絵図」安政4(1857)年



第5図 「東京実測全図」明治28(1895)年



第6図 上行寺境内図 (「御府内寺社備考」)



第7図 上行寺跡・同門前町屋跡遺跡全体図(1) (方眼は4m)



上行寺跡・同門前町屋跡遺跡全体図(2) (方眼は4m)

どんぶり問題・わりばし思案（四）

寺島 孝一

（当会世話人代表）

三葉葵^{かわらけ}の土器

新宿区南町遺跡や南山伏町遺跡などで、見込みに三葉葵の押印のある土器が見つかっている。井汲隆夫さんは『東京都新宿区市谷仲之町遺跡』（1995）の「かわらけ」の考察のなかで、この土器を紹介しているが、特に説明は加えていない。

中野高久さんは「型押し文土器皿」（『江戸在地系土器の研究』、2000）のなかで、上記のほかに、寛永寺護国院・同常照院跡・凌雲院跡など、徳川家とゆかりの深い場で見ついている例を紹介し、「御用土器師」の存在を示唆している。また、三葉葵には陰陽両種の押印があるが、見つかる数がきわめて少ないことから、「一点物」の可能性を指摘している。

この特殊な土器の生産地や、使われた場については、わからないことが多いのだが、私が文献を読んでいて気がついた、この土器に関するささやかな史料を紹介したい。

平戸藩主^{まつら}松浦静山（宝暦十年-1760-～天保十二年-1841-）の『甲子夜話』巻五十四に次のような記事と挿図がある。

賤機^{しずはた}山より葵御紋つきたる土器を出す。予駿府の便にこれを得たり。

御先手同姓忠右衛門は始め奥を勤めたる者ゆゑ、これ官にて何の御用になるものやと尋たるに、彼も、未だ見ざる品と答ふ。すれば何の御用なる者か。抑陶処にて何の由有て造り来る所乎。

其圖	一八徑三寸四分	深サ八分弱
	一八徑三寸七分五厘	深サ九分強
御紋ウチコミ	一八徑四寸一分五厘	深サ一寸



『甲子夜話 4』
（平凡社東洋文庫）より

卷五十四は冒頭に、

文政六年、同姓和州駿城加番を命ぜられて、九月に江都を發す。予品川に送る。託して曰。駿府必ず今古の異聞あらん。小大に限る可^べからず。和州を始として従者にまで至る迄皆聞見を記して書信に附しておくられよ。和州諾して別る。是より魚雁到る毎にかならず必記し来る。乃冊となし、題して『駿番雜記』と云。

とあり、駿河からの書信をまとめたものである。

賤機山は静岡市の北にあり、その南麓には浅間神社が鎮座している。この神社は、富士宮市にある駿河国一宮、山梨県東八代郡にある甲斐国一宮の両浅間神社とともに徳川家の崇敬が厚く、三社の神領をあわせて2600石以上にのぼったという。

土器についての記述は、はっきりと分りかねる部分もあるが、賤機山のどこかでこの土器が見つかったということだろう。そして「抑そもそも陶処にて」とあるから、そこで土器を焼いていたと考えていたらしい。そして、描かれている図によっても、新宿区などで見つかっているものと、同じ手であることは間違いないだろう。みつかった量はわからないが、図に添えられたただし書きによって、その寸法に三種あったことがわかる。

送られてきた図をみて、大名（外様ではあるが）である静山も、奥勤めをしていた「同姓右衛門」にしても、かつて見たことのないものであった。

ここでこのことについて論ずる力はないが、このような土器が使われても不思議でない場を、気のついたままに一、二あげてみたい。

同じ松浦静山の『甲子夜話続編一』に、

〔一〕重き御祝儀御能のとき町入見物のことを前集に云たり。（中略）

或人曰。御能見物に出る町数、八百八町。

見物の者人数、五千七百十四人。

（中略）夫より見物して御中入りのとき、後の人数へ替りとして退散す。この時御玄関前に出れば、町奉行、此度の御祝儀として食事下さる旨申渡し、代として一人青銅一貫文づゝ下され、御酒、御菓子下さる。御酒は錫瓶子にいれあり、御菓子は紙に包み、土器にのせ下さる。（傍点 - 寺島）（後略）

とある。この御酒と御菓子が、どのくらいの数下賜されたかはわかりかねるが、

又下されの御酒、錫瓶子に入れたるを取渡すと、町人ども争よりて飲んとし、後は瓶子を引合て、錫器ゆゑねぢ切りて両断するもあるとぞ。

とあり、また川柳にも

錫の徳ツ利やるまいぞやるまいぞ（『誹風柳多留』121編28）

などあることから、さほど多い数ではなかったことが想像できる。そしてこのような使われ方がされたとすれば、この土器が町人地からみつかつてよいことになる。ただ御菓子を下賜する時に使うのであれば、大きさは一つでよさそうだが、賤機山では三つの大きさのものがみつまっているのが難点だろう。

もう一つ、柳営の正月の儀礼をあげよう。『徳川実記』にも見られるが、ここではやや詳しい『藤岡屋日記』を見よう。これは御成道に店を広げた古本屋による記録であるが、どこから情報を得たのか、以外に正確であるという。

第拾九、弘化四未年正月朔日条から、土器という言葉を拾うと、

公方様 御捨土器

右大将様 御捨土器

（中略）

数之御土器

有馬兵部大輔

御捨土器

由良播磨守

（中略）

御引渡、御土器

織田大蔵大輔

などがあり、また同二日条には、

御盃

横瀬美濃守

御引渡

宮原撰津守

御捨土器

品川豊前守

（中略）

御引渡、御土器組付

大沢右京太夫

御捨土器

大友豊後守

（中略）

数之御土器

中条中務大輔

右順二頂戴之、畢而御銚子入、御引渡取之、数之御土器其俛置之、年寄共御取合申上之、着座之面々退去、過而御銚子出。

(中略)

最前より御前二有之数之御土器二而被召上、御加無之、(以下略、傍点 - 寺島)

などの記載がみられる。これは徳川時代でもかなり後のことであるが、たとえば『有徳院殿御実記』(吉宗)巻四、享保二年酉正月元日の条にも、

長沢壱岐守資親御捨土器持出て御前に備へ。中条対馬守信実御酌。(傍点 - 寺島)

などであるから、このような儀式はほぼ前例を踏襲しているのだろう。これらの儀式の具体的な様子を、文面から具体的に知ることは私にはできないが、「御捨土器」や「数之御土器」などいくつかの種類、あるいは呼びかたがあったことがわかる。そして、柳営での儀式の場で使われたものとするれば、この器が千代田城の外で見つかる可能性はきわめて低いものになる筈である。

静山が考えていたように、賤機山で焼かれたものなのか(浅間神社での、徳川家の何らかの儀礼に伴うものとも考えられるが、そうであれば書信は、神社あるいは付近と書くだらう)、あるいは江戸で焼かれたものが、駿河に持ち込まれたのか、判断する材料を持たないが、この時代の雰囲気からいって、戯れに作られたものでないことはたしかだろう。

しかし、文政年間には、外様とはいえ大名、あるいは奥にかかわる職にあったものが、これを「未見」としていることは、古くまた一時的に用いられたものである可能性を示唆しているのだろうか。謎の多い土器ではある。

企画展「名古屋城下の“ゴミ”事情」

期 日：2002年7月27日（土）～8月25日（日）

場 所：名古屋市博物館
名古屋市瑞穂区瑞穂通1-27-1

趣 旨：名古屋城下町の発掘成果を中心に、廃棄土坑をテーマにすえ、
遺構・遺物を通して、当時の生活環境を考えます。

- 内 容：
- 1 ゴミ溜めへの招待：市域各地の廃棄土坑を遺跡紹介もかねて紹介
 - 2 ゴミにはゴミの事情あり：出土したものから、それらが使われてゴミになるまでの「履歴」を紹介
 - 3 まちを流れる水のみち：上水道を中心に、城下の水環境（悪水・井戸・河川）と人々との付き合いを紹介
 - 4 もうひとつの名古屋：尾張藩の江戸上屋敷（市ヶ谷藩邸）の遺物を通して国許との関連を紹介

詳しくは名古屋市博物館ホームページ <http://www.ncm-jp.com/> をご覧下さい。

主な出品資料は愛知県埋蔵文化財調査センター・名古屋市見晴台考古資料館の遺物、東京都埋蔵文化財センター発掘の尾張藩上屋敷跡遺跡出土資料、名古屋市博物館を主とする文献資料です。

会費納入のお願い

江戸遺跡研究会では、会報送付の通信費として1年に¥1,000の御負担をお願いしております。この時期になってしまいましたが、2002年につきましても同封の振込用紙にて通信費の振り込みをしていただけるようお願いいたします。なお前年以前の未納入の方につきましても重ねてお願いいたします。なお、3カ年以上未納の方は、送付は希望しないと判断させていただきますのでご了承ください。

第86回特別例会のご案内

江戸遺跡研究会・たばこと塩の博物館共催

特別例会 『最近の発掘調査から』

日時：2002年7月14日（日）10:30～16:45

報告：

- ・寺島 孝一（江戸遺跡研究会世話人代表）
『誹風柳多留』にみる江戸のくらし - 焼塩、タバコをはじめとして -
- ・富永 樹之氏（神奈川県教育委員会）
大山街道厚木宿の発掘調査(神奈川県厚木市東町二番遺跡)
- ・金子 智氏（千代田区遺跡調査会）
千代田区東京駅八重洲北口遺跡の調査
- ・仲光 克顕氏（中央区教育委員会）
中央区日本橋二丁目遺跡の調査

会場：たばこと塩の博物館

入場料(100円)は各自御負担
いたたくようお願いいたします。

交通：JR山手線渋谷駅下車 徒歩10分

定員：80名（先着順）

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室

03-5452-5103(寺島・堀内・成瀬)

江戸遺跡研究会公式サイト

<http://www.ao.jpn.org/edo/>



【編集後記】毎年恒例の特別例会は、たばこと塩の博物館との共催で同館で行います。
会場が変更になっています。ご注意ください。